毎月一回１５日発行昭和４８年6月15日発行第４２・４３号（昭和４５年９月４日第三種郵便物認可）

リベルテール

5・6月合併号

Libertaire VoL.Ⅳ.No 6.7

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月　四日第三種郵便物認可
昭和四十八・六月十五日発行第四・二・
三面一〇〇円（送料共）

リベルテール　一部　100円

Le Libertaire　毎月一回１５日発行

昭和48年6月　日発行　Vo, Ⅳ No6.7

編集兼発行者　三浦精一

発行所　東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

（振替東京133830番　三浦精一）

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナルシズムは永遠の思想であり、普辺の思想である。これを歴史的、地理的、社会学的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。

それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナルシズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立って、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナルシスト（リベルテール）のグループであることに変りはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとずくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変りはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦を戦かう　（三浦）

目　次

有島武郎の農地解放と加藤一夫のかかり合い　塩　長五郎　1
アナキズム史論の曲折その2
大杉栄はエスペラント協会の創立者とはいえない　宮本正男　3
岩佐作太郎の擁護　1-3　布留川　信　6
ゲリラとアナーキスト　オーグスチン・スーシー　9
清水君の手紙　13
野火　16

有島武郎の農地解放と加藤一夫のかかり合い

――アナキズム史論の曲折　その二――

塩　長五郎

大杉栄がクロポトキンの提起した労農会議の思想を実現する将来社会に対して、強く反論した例の「社会的理想論」を、更に自由人連盟の二、三の同志が、大杉の説に異論を唱えて、クロポトキンの説を支持したことを述べた。何分当時はまだ労農会議の思総に対する深い協議がなかったので、この異論もウヤムヤのうちに終ってしまった。恰度その頃、即ち大正十年頃は、自由人連盟の加藤一夫の許に、有島武郎が、しきりに農地解放の問題について、問いかけている時であった。有島は、厳父から譲与された北海道の広大な農地を、如何に解放するかで悶々としていた時であり、それに当時すでに、畏友武者小路実篤が、九州の日向に、「新しき村」を建設して、新理想の一端を示していたが、社会主義者から強い批判を浴びている時でもあったし、有島自身も「新しき村」に対しては、至って批判的であり、武者小路の企ては、むしろ失敗に終るであろうと云う見解を持っていた。従って、自己の農地解放も、どのようにしたら労農解放運動の一助たり得るかで、苦心していたのである。これに対して、加藤一夫が、どのような助言を与えたかは詳らかではないが、農地解放の結果から推論してみて、決して将来社会の礎石の一助になるような仕方のものではなかった。農地解放された農民は、なる程自作農となったが、中には後で、与えられた土地を売って、金に替えて都会に出てしまった農民もいた。この点武者小路の「新しき村」は、もともと労農解放運動のもとに建てられたものではないが、たとえその理想は、ブチ・ブルジョア的なものであれ、ある計画があっただけに、一つの信念が生かされ、新しき村は永続きがした。

もし有島の農地解放の場合、あの時、即ち大杉栄の「社会的理想論」を反駁した、津田光造や佐野袈裟美の説を、もっと深く検討していたら、クロポトキンの提起した労農会議の思想、即ちコンミュンの思想に近いものが

助言されて、有島の農地解放には、もっと意義のある歴史に残るような農地解放が、出来た筈だと思う。それに有島自身も、当時は社会主義同盟が結成された時で、加入の勧誘をうけていたが、彼は自己のブルジョア階級出身を恥じるようにして、自分は同盟に加入する資格がないと、これを拒否しており、その代りに、社会主義者に対しては、献身的な物質的援助をなしていたのである。この意味において、彼の農地解放も、こっちによいプランさえあったならば、望み通りの社会主義的理想郷が実現されたかもしれない。ところがこっちにそのプランが欠けていたし、それに当時の革命観が極めて素朴なものであり、労働者が革命を起せば、労働者の意志と本能で、創造力を発揮し、適当に労働者の新社会を建設する、これにはなまじ学者の説など不用である。むしろ邪魔だと云った説が、大勢を占めていた。

いかにも、労働者の自主自立の精神を鼓舞することは、重要な第一条件ではあるが、将来社会を建設するためには、労農会議の思想を体系化することも、更に重要なのである。云うまでもなく、アナキズムの主要主題は、国家機構を解体し、それにかわるに、地方自治体を強固に組織すること、これには労農会議の思想を充実するコンミュンを、運営し発展させる力を持ち、これを更に全国連合にまで築きあげることである。であるから労農会議の思想を体系化することは重要な課題なのである。

加藤一夫が関東大震災の時に検挙され、退去命令によって、東京より兵庫県芦屋に退去し、この地で個人雑誌「原始」を発刊しながら、農村問題に没頭し、農民自治会や「農本主義」の著作に専念したのも、この反省からである。これが加藤一夫をして農本主義者たらしめた第一原因なのである。

さて、有島の農地解放に関して、大杉栄はどんな助言をしたであろうか？　これも詳らかではないが、ただ、有島の農地解放の処置に対して、大杉は余り好感を寄せていなかったという風説だけが残っていた。私はこの真相を知りたいと思い、後年、近藤憲二氏を訪れて、聞きただしたところ、氏は殆んど記憶がないという答であった。

最後に有島の農地解放の意図と、武者小路の「新しき村」の意図とを比較することも無駄ではないと思う。武者小路の「新しき村」の意図は、彼の云う人類の意志、即ち大調和が自然の意志であり、この精神を基調にして建設したもので、そこには階級斗争の否定を唱っていたものである。ところが有島の農地解放には、尠くとも、労農解放運動の線に沿うようにしたいという希望を持っ

ていた。それだのに、結果的には、その意図から全くはづれてしまった無意味なものになってしまった。これを思う時、クロポトキンの提起した労農会議の思想を、更に検討し体系化することの必要を痛感せざるを得ない。

思えばクロポトキンの労農会議の思想を提起した「西欧諸国の労働者に与う」の一書は、クロポトキンの思想の総決算を、一つに短縮したもので、頗る重要なものだと思う。

この意味で日本に芽生えた農本主義は、ある意味を持つものであると云えるが、しかしこれを育てた社会状勢が、頗る異常であったために、行き過ぎた農本主義が育ってしまった。即ち大東亜戦争・太平洋戦争へと、国をあげての戦争の突入が、正しい労農会議の思想を育てる地盤を失ってしまったのである。

大杉栄は日本エスペラント協会の創立者とはいえない

宮本正男

一九〇六年、大杉栄、黒板勝美らと共に日本エスペラント創会を創立、というのが大ていの大杉研究書、またはアナキズム運動史の一項目として、ほぼ定着しているもようである。わたし自身アナキストではなく、また青年時代、いや少年時代の一時期をのぞくと、アナキズムとの接触はほとんどなく、エスペラント運動の中の、戦争中の思想犯保護観察所関係で知りあいになった若干のアナキストを知人に持つだけで、この方面の消息に明るいとはいえない。そこで「定着している」と断言できないのであるが、どうも、こうなっているもようである。

岩波文庫の大杉論文集につけられた飛鳥井雅道の解説などがそうであるし、小田切秀雄たちの文学史年表のたぐいもこうなっていた。大沢正道の「大杉栄研究」はどうか、かんじんのところをみていないので困るのであるがこの人にも、この方面での研究の進歩を考えられない。

ところでエスペラント運動側の記録をみると、こうなってはいない。

以上、協会成立の事情を日本エスペラント協会の記録を追ってみると ー

一九〇五年三月一九日発行の「直言」誌上に、堺利彦

が黒板勝美の談話によって「エスペラント語の話」という記事を書いた。

同年、岡山六高教授、E・ガントレットがエスペラントの通信教授をはじめた。ガントレットというのは、ウェルズ人で、ガントレット恒子の夫といった方がわかりやすいだろう。恒子の弟が音楽家の山田耕作。

一九〇五年から六年にかけて、黒板勝美、安孫子貞次郎（中村有楽がやっていた有楽社の支配人で、山鹿泰治にとっては先輩にあたる）や、村本達三（ガントレットに学んだ）その他の人びととの間に交渉があり、一九〇六年六月一二日「神田一ッ橋の学士会事務所に於て協会創立の相談会が開かれた。此処に集った人々は皆熱心なるエスペランチストであったから、異議なく日本エスペラント協会設立の協議は纏り此席上で」「協会の規約を定め、評議員及幹事を撰定し、直ちに第一例会に移った」とあり、当日集った人の名をあげている。藤岡勝二、斯波貞吉、飯田雄次郎、黒板勝美、浅田栄次、足立荒人、丸山通一、安孫子貞次郎、薄井秀一、古賀千年の十名。選出された評議員は、安孫子、藤岡、山県五十雄、堺利彦、高楠順次郎、足立荒人、磯辺弥弥一郎、黒板、関根三郎、田川大吉郎、浅田、飯田、丸山、斯波、薄井で、このうち、安孫子、黒板、薄井の三人が幹事を兼ねた。

思うに東大助教授、文学博士の黒板が、ネームバリューと行動力において、安孫子は有楽社の社主を説得して協会事務所を同社において関係、薄井は読売新聞記者の経験をもって、宣伝方面の担当や協会機関誌の編集にあたるためであろう。

つづいて七月一二日に第二回例会を開いた。出席者は安孫子、浅田、藤岡、飯田、黒板、堺、斯波、田川、薄井のほかに、丘浅次郎、和田萬吉、松井知時、井口丑二、原松治、松井和一郎、石川安次郎、岡田栄吉、木内禎一、大杉栄、古賀千年の二十名である。

大杉栄が評議員になったのは、同年九月二八日の協会第一回大会でのことである。このとき、大杉は接待委員とかで受付係をしており、自訳の「桃太郎」を朗読したのは、周知のとおりである。

大杉がエスペラントのことを知ったのは、前掲の「直言」を介してであり、またエスペラントを学習したのは一九〇六年三月一五日の電車運賃値上事件のとき検挙されて未決にいたとき、ガントレットの通信教授によってである。このとき検挙されなかった堺利彦も、かれと前後して同じくガントレットの厄介になっている。大杉が保釈になったのは、旧版「大杉栄全集」第三巻の年表によると六月二一日のことである。六月一二日の第一回会合に出られなかったのは当然であり、さらに三月以前にも行なわれた協会創立の準備に参加していないことは、以上の事実で明白である。六月二一日保釈というのが、この全集に多い語植のひとつであっても大体の事実は動かない。

「社会主義者・無政府主義者人物研究資料」一、（社会文庫　一九六五年）につけられた「大杉栄の経歴及言動調査報告書」という詳細をきわめた当局側の記録には、「自宅に英・独・仏・露・伊・西・エスペラント教授の看板を出し」ウンヌンの記事があるが、協会に関係したことは出ていない。調査が行きとどかなかったとは思えないが、なぜだろうか。もちろん、協会創立に尽力したとは書いていないし、この事件での保釈の日付も記載されていない。

「大杉、協会創立」という神話が発生したのは、いつのことだろうか。思うに、旧版「大杉栄全集」第三巻の年表に、「この頃、彼は、黒板勝美、千布利雄等と『日本エスペラント協会』を創立した。彼はまた、日本エスペラント界の先覚である」とあるところから来たのではなかろうか。「先覚」であることはもちろんだが、「創立者」に擬するのが早計であることは前述のとおり。この記事についての責任は、全集編集者の近藤憲二、安成二郎が年表作製者として、またエスペラント関係の材料を提供した山鹿泰治が負うべきものであろう。もっと荒っぽくいうと、「ああ、協会か、あれはオレが作ったようなものだ」という大杉のことばをそのまま信じこんだのが、この人びとの誤りになったのではなかろうか。

この神話がどう発展していったのか、それを跡づけるのはむつかしいが、一九三〇年の「現代日本文学全集　社会文学集」の大杉栄年表で定着したのではないかと思われる。これがエスカレートすると、六月一二日、「東京高等商業学校生徒加藤節の主唱が実り、日本エスペラント協会創立。この日、東京で発会式、大杉栄、黒板勝美ら出席」という岩波の「近代日本綜合年表」のヨタ記事になってくる。注を加えると、加藤節がエスペラントの運動の先覚者であることにまちがいはないが協会創立のために直接働いてはいない。この「近代日本綜合年表」が資料としたという「日本エスペラント運動史料　一」というのは、この本が書いているように日本エスペラント運動五〇周年記念行事委員会が発行したものである。ついでにいうと、この岩波の年表は、エロシェンコ追放ものっていない相当ズサンなものである。

なお、協会での大杉の登録番号は二〇一、堺利彦は一

三、福田国太郎は一〇〇、山川均は一九二、山川の盟友守田有秋は二五五、同じく浜田仁左衛門は二四四、相坂佶は四一五、山鹿泰治は九〇四である。（エスペラント運動史研究会会員）　第三表紙へつづく

岩佐作太郎の擁護　―3―

布留川　信

岩佐の山賊論は、あまりよい表現ではなかったといわれます。それでは、もっと衝撃度の弱い表現であったら、どうかということも一応考えられますが、それは決して岩佐の容認するところではなかったでありましょう。なぜなら、岩佐としては、現実の労働運動は、いかにも花々しく戦闘的で、革命的に見えるかもしれないが、実は、それは錯覚であり、その本質は資本主義と何ら異るところのないものであり、あるがままの労働運動では、決して革命運動にはなり得ないという事実を深く印象づけることが当時の岩佐の目的であったからだと思います。したがってショックが、大きければ大きいほど、効果的でよいというのが狙いであったのではないだろうか。ところが、ショックはショックでも、そのショックはおそらく岩佐の予想もしなかった意味のショックであったのであります。

岩佐の予期したショックとしては、その結果として、そこに必然的に起る労働運動に対する一層深い反省と、全く新しい自覚による心構えを、人間に対する信頼感をこめて期待したのであります。その心構えとは、狭義にはわれわれ自身の労働運動に対する心構えのことでありますが、広義には資本主義そのものに対して否定の倫理を身につけることであります。

岩佐の期待した以上のような意味で、山賊論が理解されるためのものであったとすれば、山賊の表現は非常に効果的であり、また人間心理を捉えた、それこそ、ほんとうの社会科学的論理ともいうべきものであったのであります。ところが、マルクス主義に毒されたサンジカリストは、岩佐の否定の論理にだけ心を奪われて、その背後にある岩佐自身の否定の倫理に同感できず「理論が否定であるから行動も否定である」と独断して、岩佐が労働運動を否定したと非難するのであります。岩佐の予期に反して、かれらの受けたショックは内に向かって反省

ストのために信頼すべきコミュニケーション・チャンネルと相互扶助をうちたてることである。われわれの最近の活動は、スペインにおける在獄者に毎月小切手と小包を送ること、イタリアでのヴァルブレダなどの防衛闘争を活発に支持すること、そしてラテン・アメリカのレジスタンス活動との連絡を確定することを含んでいる。われわれの資金源が増大するにしたがって、われわれはわれわれの在獄者支持を拡大するつもりである。

この機関紙は、つねに情報を知り、接触を保ち、その上、何が為されねばならないかについて考えを交換する手段である。われわれは諸君が、われわれがやっているような仕事の緊急性を深く感じて、われわれの仕事に参加することを望むものである。

この機関紙には、今ドイツに居るオーグスチン・スーシーの「ゲリラとアナーキスト」やフランコ政権に反抗して20年の刑に処せられたミゲル・ガルシアの手記の要約などが出ている。　（三浦）

×

四月号は、僕が生活に追われて全然何も書くことも、編集することもできず、いつも助けてくれている同志たちに、全面的に頼らねばならなかった。それやこれやで発行がおくれて申訳ない。

そのために、第42号を「5・6月合併号」とし、第43号から発行日を守るようにしたい。諸君からの原稿を期待する。　（三浦）

6ページからのつづき

なお、大杉は一九〇六年九月あたりから、東京外語の研究誌「語学」にエスペラント講義を連載しているはずである。わたしは見ていないが、新旧ふたつの全集ともこれを収録していない。